

三河 アララギ

2022年 令和4年10月 神無月
かなづき

十 月 号

第 六 十 九 卷 第 十 号



ニューヨーク日記(192) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

SEA TURTLE NESTS

Blue Shoe Diaries



この囲いなんだか分かりますか? 海辺によく行くマイアミの人間は毎年のことなのでよく知っています。これは海亀の卵を守っている囲いなんです! 海洋生物学者の人達が砂の上の亀のトラッキングを観察していて見つけるとその周りにこの様な目立つフェンスを建てるのです。大体一回に卵110個ぐらいあるらしいです。そこからは卵がかえるまで何週間も毎日観察です。何年も卵を産みに来てる亀さんに会わないかなと思っていても通常夜中らしいので未だに見た事ありません。今年家は家の目の前にこの巣があるので海亀ベビーたちが海に帰って行くの見れないか超期待! がんばれ~ベビーたち!

Do you know what this is? People in Miami by the beach are familiar with this seasonal fence yearly. They are fences protecting sea turtle eggs! Marine biologists spot the tracks of a turtle to know if a turtle came to the beach to lay its eggs (on average it's about 110 eggs per nest!). Then they keep watch over several weeks to make sure the eggs hatch and the babies go back to the sea. I wasn't able to see a turtle lay eggs since it tends to happen at night. Maybe I'll be lucky enough to see the hatchlings! This year there's a nest right in front of our condo! Good luck, baby turtles!!

目次

第六十九卷第十号(通卷八二六号)

表紙・しめ縄 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(192) Blue Shoe(2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫(4)

昭和46年七月号作品 大須賀寿恵(6)

昭和46年七月号作品 夏目 勝弘(7)

昭和46年七月号作品 岡本八千代(8)

面影偲ぶ 弓谷 久子(10)

隠岐島にて 今泉 由利(12)

青田風 安藤 和代(14)

お続け下さい 清澤 範子(16)

歌稿を書かむ 山口千恵子(18)

鬼灯 杉浦恵美子(20)

思い出の 伊藤 忠男(22)

網戸の風 白井 信昭(24)

いましかできない 矢崎 直人(26)

附録(四) 矢崎 直人(27)

『いとよせ』 いーはとぶ

稲吉 友江(28)

鈴木美耶子(28)

吉見 幸子(29)

牧原 正枝(29)

森 厚子(29)

山崎 俊子(30)

伊藤 晴江(30)

水野 絹子(30)

牧原 規恵(31)

現代学生百人一首 東洋大学

沖 彩寧(32)

角 和泉(32)

宇津野ひなた(32)

深澤 優香(32)

岩男 夏鈴(33)

椎名 偉大(33)

山口和花奈(33)

尾藤 咲良(33)

植村 公女(34)

木村 歩歩(34)

今泉 如雲(34)

今泉 由利(35)

矢崎 直人(35)

五感を澄ませば(4) 杉浦恵美子(36)

楽しい時間(119) 山本紀久雄(38)

『酔いの徒然』(126) 丸山酔宵子(40)

ばつてん長崎歌の街 高橋 育郎(42)

絹の話(143) 今泉 雅勝(44)

「江上浩二の独り言」58 江上 浩二(46)

初狩便り11 花野みぶり(48)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 本田 勇氣(50)

康鍼治療院 玄翁(52)

隠岐島吟行会 川口カルチャースクール有志

隠岐島吟行(其一) 横山精真(54)

隠岐島吟行(其二) 横山精真(56)

俳句 俳句(58)

短歌 短歌(61)

編集室だより 今泉 由利(63)

「三河アララギ」について(64)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

ひるのねむり覺めはてなくに書きとどむたちまち化して塵となるもの
起ちあがる足のあやふし一年のもつとも長き日のけふも過ぐ

千年のまへに末世まつせの嘆きあり公害などは知る筈もなく

生きてゐるだけでよろしと思ふべし慾に動けばつまづくものを

大宵待草の花に明かむ窓あけてはばかりもなき入浴をする

裏庭の松の林の松風の音はやさしも空わたりゆく

來迎らいがうづ圖のうちに音ありきこえるひびきは遠し松風のおと

いのち拾ひて歸りきたりて建蘭の花の終りに逢ひき去年は

まつすぐに並び伸びたち黄の皮をつぎつぎ脱ぬぎておとしゆく竹

人に草をとつて貰へば跡かたなし黄花曼珠沙華節黒仙翁

歌集 「草々後集」

今泉米子

ドラセナの長き緑の葉しづまれり思ふことなきこの夕まぐれ
一抱え荒地野菊を捧げくる媪はわれの隣り人なり

飛び石の一つの廻りの草ひきて今日の日光浴の時間了りぬ

あるがままの鬼百合の朱いくところ万緑叢中のわが奥の庭

西の窓に射せる夕日の消えゆきぬ何を為ししか一日のはやし

よべの花二十九まで数へしが雨にうなだるる月下の美人

窓の下に梔子の花白くして言ひ出づることもなき日々の過ぐ

草を踏みて歩むよろしと言ひながらわが庭のみちの二三分ほど

お隣の庭の向日葵われに向きて眩きばかり黄にかがやけり

芭蕉葉の巨きま青の立ちひろがり雨間なびかず夕昏みゆく

昭和46年7月号作品

大須賀寿恵

易々^{やす}と吾がてに捕えし蜜蜂を萼あぢさゐの花に移しぬ

雀らのこゑのかしまし遠くなりし人をしきりに恋ふる朝あけ

左手の指より登りし黒き蟻腕にいたりて這ふ感じする

立ちあがるその折々に座布団につまづくものかわが白き足

脂うかず化粧くづれぬわが顔を健やかならぬ証と云ひぬ

奥の歯のうづきは昨日よりつづき笹に休みぬ紋白蝶は

あかときの窓うつ雨を聞きてより下半身が痛くてならぬ

倦ゆき身に注射を受けむ黄素馨の黄の垂れて咲く門をくぐりて

くづれぬは美につながりて羨ましも不健康とも美容師はいふ

辞めむ年近くなりつつ読みはじめ学習指導要領特活の編

昭和46年7月号作品

夏目勝弘

とどとして羽根を博ちゆく大き鳶意外に早く気流に乗りぬ

ゆつくりと羽撃く鳶を見つめぬき五月の雨の音するなかに

完全に枯れたる鉢の黒松に常のごとくに水をかけゆく

父の植ゑし紅梅にみどりの葉の出づることもなくして五月のゆかむ

部屋の闇を飛びめでれるは姫家蠅吾が児帰り来る日のま近かとなりぬ

午後の日のかげりしときに思ひ出づ苔に覆ひを忘れしことを

握りゐる今朝の白飯の柔くし曇りを映す湖を恋しむ

舟虫を空揚げにしたらば旨からむ尾奈の小さき出崎をめぐる

赤みおぶる湖の水のたゆたひを小高き駅のホームより見る

耕地整理すみし荒田の中の道を引佐細江とただに歩みぬ

昭和46年7月号作品

蒲郡 岡本八千代

浜名湖のあたりも父は該しかりき明日はゆかむその吟行に

引佐細江をイナサササエとよみてゐつ昨日のわれはいづことも知らず

浜名湖の入江内浦見えはじめここに会費を集め終へたり

十六人の会費集めて膝の上に百円銀貨のゆれて音する

猪鼻湖の入江の汀に青々と若葦数の子草なんとか葦もどき

さざ波のゆれて寄せくる道をゆくとほつあふみの道ゆるるること

「浜松」の地図を小さくひろげもちて風に吹かれつつ乎那の道ゆく

浜名湖のコバルト色に刷られたる浜松の地図をわれものぞきぬ

引佐細江の入江の岸のうまごやし疲れてわれは腰下ろしたり

父の形見の松の盆栽のあひだには苗代菜菔の鉢も並べぬ

菜菔の花咲けども菜菔の実はならず成らぬでままに父は逝きなき

菜菔の實の二つ熟るるを見に来よと夫のしきりにわれを呼ぶ声

この夜もおのれの生命惜しみつつ父の忌幾度もわが営まむ

父の菜菔のあからむまでは父のこと忘るともなく忘れ過ぎきぬ

ぐみ二つ成りてあからむこの夕べ呼べば亡き父の来り見まさむ

面影偲ぶ

豊川 弓谷 久子

心静かなひと日であればそれでよし満ち足りてをり今の世の中

あの日より七十七年大空襲に死にたる友等の面影偲ぶ

ふえ続く数をニュースは告げてをりコロナウイルス身近に迫る

丈高く高砂百合が咲き出せり盆が来るよと風にゆれをり

妹が訪ね来りし夢を見る覚めても暫し面影残る

墓参り子等に任せぬ常の日と変わらず今年の盆も過ぎゆく

幼なき頃を思い出しつつ子とペアのパジャマ縫いをり子の友へと

草をひく我の手元を飛び交はすそら豆色の小さき蛙

「やせ蛙負けるな一茶ここにあり」一茶の心に又もなりをり

悔い多き人生なりき我が子には踏ませとも無し我がわだち

マラカスとコキア高だか生い茂り庭の一角占領したり

子と共に答えをさがすサンデー版のクロスワードを楽しみて

稲田へと移りゆきしか雀等は庭に食パン空しく残る

去年の日記読み返へしをり去年の今日も残暑きびしと書かれてゐたり

油蟬の啼き声何時しか法師蟬と変わりてゐたり葉月も終る

隠岐島にて

東京 今泉 由利

臙おぼろげ氣に思い浮かぶる隠岐島今はつきりと私にあり

見ゆるもの聞こゆることごと食すもの現実として隠岐島

この空気この神の島この歴史ひたすらひたすら本当のこと

神と人と共に有りたり隠岐島満ちあふれくることごとこのなか

常の日を過し来たりぬ今日までは心満ち満つ隠岐島帰り

自おのずから湧きいづるものゝありがとうゝ決して忘れぬありがとうございます

大宇宙そして地球の隠岐島神々しくして美し悲し

自みずからの一步一步の歩巾にて隠岐島に起こりしことを

隱岐島十九年間の御歌みにて悲痛感懷とおしま遠島の歌

遠き島二千里の海路をひき入りて松の柱に葦ふける廊

墨染の袖に凍れる涙涙とけゆく春のおとずれ

墨染の衣に散り散るはなびらは無益のことと春のおとずれ

明日には飛行機に乗り帰りゆく墨染の法の御姿心に仕舞ふ

いまの夏秋へと移りゆく空の行合の空へ分け入る

一つ日をおくれ帰り来る忘れ日傘隱岐島より宅急便にて

帰り来し焼あご再び少し焼き隱岐の誉と静かにゐます

青田風

豊川 安藤 和代

花ガラをしかと保ちて紫陽花の猛暑の庭を守りておりぬ

青田風下校の児等の笑い声つられて吾れも大笑いする

里からの夏の野菜の山盛りに遺影の母のほほえみて見ゆ

いただきし茄子に天狗茄子混りいて孫から孫へと年を渡りゆく

節電を叫ばれている日びなれば門灯を細く小さく灯す

この一羽に世界平和の祈り込め吾が折り鶴は三千羽となる

わたしも短歌に詠んで〴〵と言う様に朝あさ窓に雀来て鳴く

苦手だと思っておりました紅茶なり友と一緒に味わいよろし

バアチャンの焼ソバキャベツが多過ぎと笑って孫はおかわりを言う

世は変り人の心も変りたり木槿の花は純粹の白

柴犬は吾れと暮らして十八年食事時くれば大きく知らす

母逝きて四十八年よ夢の如あの日と同じ葉月猛暑日

猛暑昼ひよも雀も鳴かずして吾まきしパン乾ききりたり

仙人が現わるる如雨雲の切れゆくが見ゆ弓張の峰

酷暑にも排ガスにも負けずバイパスの百日紅はあわあわと咲く

お続けください

豊川 清澤 範子

お母さんアララギ投稿止めたら惚けちゃうよどうか投稿続けて下さい

庭椿つやつやの葉はいつの間に深緑に替りてをりぬ

三十度を越す日々続きをりぬシルバーカー引かず出られず

夏蝉は晴れて鳴きゐて一時をいずれに行きしかまた庭に鳴く

細やかな夫でありたり家中の所々にアイデア残し

吾が足は立つ時グラリとよろける廊下にモップ掛ける時まで

左手の骨折は思いの外なりでも右手でもなく足にでもなく

風呂上り体重計に乗ってみる吾四十二K娘より十K軽ろし

娘と吾と二人暮しの生活なりあれこれ意見を出し合ひながら

予報士は八月三日三十八度棒をふりふり予報する

じっとして居ても汗は背すじを流れくるクーラーの中にして水分補給

夫の戒名「えんとくいんぎがくじつどうせいこじ圓徳院義覚實道清居士」娘は胸に抱く涙流して

娘とは実の親子と言うことか時々は笑って皺しわの手みつむ

掃除機をかけ終りし後の暫らくはクーラーの中ラジオFM放送を聞く

未だ少し腕の外側痛むなり娘は「日にち薬よお母さん」

歌稿を書かむ

春日井 山口千恵子

子の使ひし鉛筆削りに鉛筆削る月に一度の歌稿を書かむ

紅の色あざやかに咲くサルスベリ朝より暑し蝉の鳴き声

蝉の声止だえて聞こへぬ昼暑し伸びたる指の爪切りてをり

今年から栽培縮小せしと言ふ弟より貰ふ巨峰ブドウ

貰ひたるブドウは黒く粒大きく一粒つまむその味甘し

家居にはエアコンかけて過せよと訪ひ来し弟言ひて帰りぬ

高齢者実態把握調査票書き入れてゆくなり高齢者われ

書き終へしアンケート入れし封筒を持ちて夕べのポストへの道

水田の中干し知らせる回覧板稲作止めしわが家にも来る

貰ひたるメロンが一つテーブルに食べ頃いつかとさはりみてゐる

わが家の墓のまはりの草取らむ持ち来し百合の花も供へむ

夕べ吹く風にむかひて歩き行く出穂未だの稲田の道を

法師蝉一声二声鳴くを聞く暑き夏の日秋に近付く

くろぐろと続ける蟻の行列をたどり見たりき幼き想ひ出

群なして小魚泳ぎゐし用水路今は生きゐるものの姿を見ず

鬼灯

蒲郡 杉浦恵美子

鬼灯を供へど連日雨続き今年の盆の御霊は何処へ

鬼灯を今夏は沢山実の付きし見事なひともと選びしものを

熱心に菊選ぶ人ふと見れば同じ檀家ぞ盆の翌朝

夕ご飯孤食は幼時を思ひ出づ遊び食ひして叱られしこと

我が食の遅さは幼時に繋がれり左利きから矯正されし故

幾たびも左手の箸直し呉し父の根気に今の我あり

この辺りひろおばさんが住みて居しビルの狭間の潜り戸の先

晩年はひとりぼっちのひろおばさん幼き頃から気になりし人

ひろおばさん祖母の姪なり晩年を世話せし人は遠縁と聞く

熊本城再建なりし天守閣と崩れし儘の宇土櫓との比

石垣が崩れし儘の公開は地震まざまざ熊本城内

崩れたるこの石垣が元通り再び組まる日何時か来るのか

おや何と車窓に雨粒当たりをり旅の終りの間もなく我が街

夜の雨思ひ至らず我が街を不在の四日に夏遠のきぬ

九州は晴天続きリユックより傘取り出しぬ旅の終りに

思い出の

大阪 伊藤忠男

日々夜明け遅くなり行く葉月時寝起き時間の気がかりなこと

大雨にズブ濡れなりて帰宅する今は青空ちよつとの間なり

西の空雨雲去りて日の光微かに漏れる夕暮れの時

どこからか迷いこんだかキリギリス涼し部屋にて涼し鳴き声

ひまわりと稲穂が同居もうすぐか豊かな恵み祝うその時

朝晩の風は爽やか庭に咲く野の花さらに輝きを増す

街角の信号待つ人増えてきた活気戻るか駅前のお店

久しぶり同窓会の集まりに顔出し笑いの渦に包まる

思い出の品は捨てるに捨てられぬ進むに進まぬ終活の道

風流も様変わりした雨模様絵にはならない今の夕立

漫画家の漫画たる故明るさに活力得るも今もういない

少年の汗が戻った甲子園やはり食い入るこれぞ甲子園

もの言えぬ国の怖さにこの世界縛られ何もできぬなりけり

雨雲の切れ目に青き空見える明日は良き日を迎えられるや

運転の免許更新やはり行く明日は認知のテスト日なりや

網戸の風

豊川 白井 信昭

農道来て交差路の傍斑入の懐かしきかなアメリカ芙蓉咲く

暑さ故家に居ながら夕の日の赤く赤く一日暮れたり

開け放つ六畳二間の裏網戸今朝はこんなにも入り来る風

掃除やめガラス戸の傍座りおり三河アララギ八月号読む

校庭を縁取りていしポプラ並木懐かしめども跡形もなし

通院の血液検査に我陽性BA5妻に移してしまへり

わが二人無症状にて十日ほど自宅療養を余儀なくされぬ

走り行くくねくね道端紅くれなゐのサルスベリ一つ視界を妨ぐ

見通しの利かずと言はむこのミラー右方の視界妨ひざしぐ庇

庭中に残る地面一区切りガレキ潰して埋めむ企み

お盆近く夕暮れせまり久しぶり家族の五人たりと会いて夕食

納涼の五人揃へり入出口線香花火の点つきては消えつ

再びを妻が植えにきタマスダレピンクに咲けり花壇の中に

掘り穴にガレキと碎石つめ込みて雨の降る毎地ごとは締まるか

庭中に竿取り置きて一区切りモルタルセメント塗り了おえにけり

いましかできない
埼玉 矢崎 直人

コロナ禍で今できることやれること自分の力蓄えていく

誰もまだ借りてはいない図書館の新着本を貸出機借る

学ぼうとする意志ヒトと人類と入り来る情報身に受く情報

掘り下げてみるみる身をの回り掘り下げてみる私の周り

歩くこと歌詠むことに歩くこと私を揺らし揺らして歩く

ベランダのプランターたち水をやる毎日見れば生きているを知る

朝と晩日に二度水をやりおればバジルとミントの葉が増えて来る

附録（四）

矢崎直人

○大木に武蔵野偲ぶ御苑かな

公園の中を歩いている時、虫が鳴いているなとは思いました。しかしながら最初、それが何か気が付きませんでした。しばらく耳を傾けて佇んでいると、蟬が鳴いている声だと気が付きました。

○夏の月白く下弦に御苑かな

数日後に、月の形と向きが全く違う事に気が付きました。下弦の月は弦が下を向いているはずですが、おかしいと思い調べてみると、7月17日の月は月齢6・57日で上弦の月でした。東京五輪の開会式の際に、ドローンを使った演出がありました。私はどうやらドローンの練習を月だと思って見間違えたようです。

『いよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

書店にて大き文字のみ捜して此処に彼処に老いは忍び来

稲吉友江

とめどなき思ひ揺蕩朝たゆたふなり思はず買ひつまつ白ブラウス

見上ぐれば群青の空無限なり今日の一日の幸せとならむ

窓々を開けて放ちて暑き今朝北窓遠くにカンナの黄花

鈴木美耶子

涼風の吹きくる窓辺い卓を置きてさながら今日は高原のカフェ

土曜日の気なき午後のがめぐり風鈴の音コリンとひとつ

暮らしたる孫らの住居東京に今日は出掛けむ心跳るよ

吉見幸子

富士山をスマホの動画に収めむとシャッターチャンス定め息止めて

孫らとのひととき過ぎし帰路の時マナカのカード改札口に

カラフルな絨毯すすみ三列目集団接種は宴会場なり

牧原正枝

猿が来たキツネは檻につかまつLINEの映像お墓の側ぞ

今朝一番カミキリ虫をつかまへる二度まで逃げるかkの結び目を

七夕のけふになりしが笹とりて平和の願ひ天に届けむ

森厚子

夕間暮れ雨と光を眺めをり雷停電になす術なくて

灰白き辺り見る間に赤みさす夏もあけばの海の日けふ

雨のなき梅雨の晴れ間にそここの家人ら庭に出でてあれこれと
山崎 俊子

真夜中の家々の灯も消されたり今はただ夜気漆黒の色

炎天に日傘をさして買物に通りなき道マスクはづして

帰省せし息子の背中見つめつつリビングルームにただ我は居る
伊藤 晴江

背すぢ伸ばし両手を腿にぢつと待つ就職試験の女子学生は

亡き父の造りし庭の変はらずをしばし見入るわれ盆参りのけふ

小雨止み巢立つ五つのつばめの子無事を祈るよ我が家の子なれば
水野 絹子

空^{から}の巢にいつ戻りしかつばめの子外の世界は風の強きか

朝五時の話し相手は夢の中母は決まつて「お茶していきん」と

年寄りのにこやかな顔集まりてボケ防止の歌高らかに歌ふ

牧原規恵

雨降れば嬉し悲しの隣り合はせ草取り三昧われの夏かな

携帯に蚊取り線香日よけ帽われの畑の必需品かも

現代学生百人一首

東洋大学

お疲れと手を振ったけど気付かれず静かにしまう私の右腕

東京都立翔陽高等学校二年

沖おき

彩あや

寧ね

16歳

深夜2時あつ読まれたと舞い上がるラジオネームは自分の誇り

東京都立立川国際中等教育学校五年

角かど

和い

泉ずみ

16歳

なんとなくスマホ片手に詠んでみる小野小町の恋の行く末

東京都立田柄高等学校二年

宇う

津つ

野のひなた

16歳

マスクどこ頭を下げてても聞いてくる見えてないのか前の貼り紙

東京都立美原高等学校二年

深ふか

澤ざわ

優ゆう

香か

16歳

すれ違いほんの一瞬視線合うバスのあなたと自転車の私

東京都立美原高等学校三年 岩男夏鈴 18歳

面談後父とふたりの通学路付き合いたての恋人のように

東京農業大学第一高等学校三年 椎名偉大 17歳

通学路雨浴び輝く紫陽花を一人楽しむ分散登校

豊島区立西池袋中学校二年 山口和花 14歳

痩せていくホッキョクグマを思い出しレジ袋からエコバッグへと

西東京市立青嵐中学校二年 尾藤咲良 14歳

『俳句』

家計簿の余白に一句良夜かな

植村公女

音たてぬ母の音あり秋真昼

秋茄子八百屋の愚痴を聞いてをり

風吹いて彩雲に舞う鷺白し

木村歩歩

心経に滂沱の汗や三回忌

朝顔や闇無かりせば花も無し

早朝の車窓に続く青田かな

孫の書に夢を信じる爽やかさ

傷だらけなる長持ちや秋雲

今泉如雲

しよざいなき残暑の午後や濡れタオル

大雨の警報解かれ虫時雨

行合の空青くして隠岐島

今泉由利

自みずからの命のことよ来迎会

豊穰と安穩の島山開く

平等に時は過ぎゐるえごの花

初夏の隠岐島ごと神であり

シジミ蝶瞬間移動眼で追ひぬ

矢崎直人

葉月は葉月の日を映しけり

大木に武蔵野偲ぶ御苑かな

夏の月白く下弦に御苑かな

五感を澄ませば（4）

杉浦恵美子

七夕

麦藁帽子が古びて、買い換えを思い立ち、探せど容易に見つからず、ようやく大型雑貨店の片隅にあつたものの申し訳程度の品揃え。でも折角なので購入。しかし連日の猛暑。不要の外出は避けるようにとあちこちから警告。

という次第で折角新調したのに今夏は出番なし。全く最近の天候の荒々しさには怖ささえ感じるほど。その上日本独特の微妙な季節感が乏しくなっていることにも一抹の淋しさ。

そんな折、あるPR誌で「ほんとうの七夕」と題したコラムを発見。

「中国には昔から書道、裁縫、芸事の上達を神様に祈る乞巧奠という星祭があつたようだ。それが牽牛・織女伝説と結び付いて生まれたのが七夕である。」

「旧暦七月七日（今年は八月四日）の月は必ず上弦となり、牽牛が漕ぐ舟に見立てられた。星座でいうと牽牛

星はワシ座の一等星アルタイル、織女星はヴェガで、旧暦七月上旬が、二つの星の最も接近して見える時期だということに古代の中国人は気づいていたのだ」

「現在、幼稚園や小学校では梅雨の最中に七夕と称して、子供たちに願い事を短冊に書かせて笹竹に結び付けている。本当は、安城や仙台の七夕のように八月上旬にもつてくるのが望ましいのだが。」

岡田邦彦『月刊なごや』第477号

そういえば子供のころ、夏休みの早朝に畑の里芋の葉の露を集めて墨を磨り、七夕の願い事を書いたことを思い出します。あの頃はまだ旧暦の七夕が行われていたのですね。そのせいか、今は五節句中で、七夕が一番本来の季節感とかけ離れている気がします。

新暦では、年に一度の牽牛と織女の逢瀬が、今宵は叶うだろうかという心配ばかりです。

当然七夕を主題とした歌など詠もうとしても星や月の出番はなさそうです。

ところで、明治初年に旧暦から新暦に変更されてから、日本の暦はずいぶん複雑になってしまいました。

何故なら、新暦・旧暦・中国由来の二十四節気が各々

約一カ月ずつずれている上、日常的に混ぜこぜに使われているから。日本文化（日本語）は何でも取り入れてしまう特性があるせいでしょうか。

七夕で言うところ、新暦では、季節は夏真っ盛り、二十四節気中の小暑、両者とも暑い頃の行事となります。

それが旧暦の七月七日の季節は初秋。三日後の八月七日は二十四節気の立秋。日中は残暑厳しくても朝晩は涼しく、夜空に煌めく天の川に上弦の月。心ゆくまで星空を見上げてロマンチックな空想を楽しめるでしょう。

まとめると、季節感としては二十四節気が「えっもう？」と逸早く、新暦はまだ一ヶ月早く感じられ、旧暦の方が実際の季節にいちばん近いような気がするけれど、「旧暦七夕は、今年は八月四日、真夏の熱帯夜だけれど、旧暦の七月は初秋、秋の行事になるのかな。そうそう二十四節気の立秋も近いし。すると真夏と初秋の夜空とではまた感じが違うんじゃないかしら。」

あらあら、まとめるつもりが却ってこんがらがってしまいました。

旧暦といえ、ある中国人の女の子に誕生日を訊ねたことがあります。すると

「私は自分の誕生日を旧暦でしか知らないから、今年は

何日に当たるのか直ぐにはわかりません」と言われて驚いたことがあります。

もつとも旧暦は月の満ち欠けで大体の日付が解るから便利な面もあります。

このように暦は案外複雑で厄介。しかし逆に言えば、単純ではないからこそ様々な歌材の宝庫になっているのかもしれない。

七夕が遠くなりけり地球には百年ぶりの疫病止まぬ

楽しい時間 119 山本紀久雄

2022年8月31日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その四

明治元年の明治天皇に関する関係事項を前号に続き振り返ってみる。

即位礼の次には大仕事が控えていた。東京行幸である。この行幸には去る8月4日に布告があり、すでに「海内一家東西同視」の叡慮によつて江戸が東京、すなわち「東の都」と慶応4年7月17日に命名されていた。

行幸は、今春以来、東国の民衆は数々の戦闘によつて多大な艱難辛苦を味わつている。天皇は、かねてより、これらの民衆を慰撫したいという願いを抱いていた。東京行幸は、その天皇の願いを実現するものである。これが公式理由であった。

その東京への遷都は簡単には決まらなかった。理由はいろいろあった。一番の理由は、8月19日の榎本武揚率いる幕府軍艦逃走であつて、東国が鎮圧されていないため時期尚早というもの。二番目の理由は財政難であつた。東京行幸には莫大な費用がかかるが、その手当てがなされていない、とういうより官軍にはお金がなかった。それに加えて、京都市民からの危惧である。京都から東京に正式に遷都されるのではないかと不安で、その心配に対し遷都ではなく行幸であると発表されていた。

この当時の東京は寂れていた。それをアーネスト・サトウは『外交官の見た明治維新・下』（岩波文庫 1960）で次のように表現している。

《出入りの商人や商店主がこれまで品物を納めていた諸大名は、今やことごとく国もとへ立ち退いてしまったので、人口も当然減少を免れなかった。江戸は極東の最も立派な都市の一つであつたから、それが衰微するというのは悲しいことだつた。江戸には立派な公共建築物こそないが、町は海岸に臨み、それに沿つて諸大名の遊園地が幾つもあった。城は、素晴らしく大きな濠をめぐらして、巨大な石を積み重ねた堂々たる城壁を構えていた。絵のように美しい松並み木が日陰をつくつており、市の中にも田舎びた所が多く、すべてが偉大という印象を与えていた》

東京遷都の発案者である江藤新平は、旧幕府軍艦を恐れて天皇の東幸が延期されれば、新政府は信を内外に失うばかりでなく、將軍と諸大名が去つた東京は寂れ果て、江戸市民は主人を奪われたも同然の思ひをしており、一日も早い東京行幸が必要だ、という力強い雄弁に加えて、大久保利通の賛成と、岩倉具視の政治的判断が相まって、問題のお金は幸いにも大半を、三井次郎右衛門を始めとする京大阪の富商が請け負つたことから、9月20日に天皇は東京へ出発した。岩倉具視、中山忠能、伊達宗城、池田章政（岡山藩主）、



「明治天皇御東幸千代田城御入場之図」(「天皇の肖像」多木浩二著 岩波新書1988)

木戸孝允を筆頭に、供は三千三百余人にのぼった。

この大掛かりの東京行幸中、天皇はどのような行動を民衆に示したのだろうか。明治天皇紀に記されているいくつか紹介する。

熱田近くで米を收穫する農民から稲穂を取り寄せ、農民に菓子
を賜り、その労をねぎらったり、静岡沿岸の汐見坂から初めて太
平洋を見たり、大井川では天皇のために板橋が架けられて渡り、
富士山を仰ぎ見て、箱根越えし、東京に入ったのは10月13日で、
最初の休憩は芝高輪で「では、泉岳寺はこのあたりであるな」と
赤穂浪士討ち入りに関心を示した。

はるばると迎えた天皇であったが、江戸つ子は日本橋の欄干に落
首を書きつけた。

上方のゼイ六どもがやつてきて、

トンキョウなどと江戸をなしけり

と、東京への改称が気に入らない落首を書き、さらに

上からは明治などというけれど、

治まる明（おさまるめい）と下からは読む

と、年号変わりに対する落首など、これが当時の東京市民の気
持ちを表していた。

そこで、11月4日、天皇は東京行幸の祝いとして東京市民に大
量の酒をふるまった。下賜された酒は、約二千九百九十樽で、加
えて錫瓶子（銀製の徳利）とするのが下賜され、市民は二日間に
わたって家業を休んで楽しんだ。

次は、11月22日の「外国公使に拝謁を許し信任状を受け取る」
儀式である。

明治天皇はイタリア公使、フランス公使、オランダ弁理公使に拝
謁を許し、彼らから信任状を受け取り、勅語を与えた。随行し
た公使館員や海軍将校にも拝謁を許した。

このタイミング、孝明天皇の死後二年に満たないことを思えば、

驚くべきことだった。なにしろ孝明天皇は決して外国人に会おう
としなかったし、神聖な日本の土地に外国人がいるということ自体
が神々に対する言語に絶する侮辱であると考えていた。

若き明治天皇は進んで外国人に会おうとしたばかりでなく、こ
の時に限らず外国人に対して常に好意的だった。

明治天皇は12月8日、東京を發つて22日京都に帰還した。東幸
に出発したのが9月20日、3か月足らずの間に奥羽越の反乱は完
全に鎮圧された。二百数十年にわたって幕府の拠点であった江戸の
町は、天皇の手に落ちた。加えて、天皇の鳳輦が東海道を行くこ
という前例のない壮挙は、京都から遠く離れた土地に住む民衆たち
に天皇の威光を知らしめる結果となったことは、疑いもない事実だ
た。

なお、旧暦だった慶応4（1868）年には、4月と5月の間に
閏4月が1か月あった。旧暦は、月の満ち欠けの周期で1か月を
決めていて、ひと月は平均29日半、1年は354日になるので、季
節の巡りにあった太陽暦の365日に対し、3年間で34日ほど不足
する。そこで旧暦では、およそ3年に1度、1年を13か月にして、
季節と暦のずれを修正した。12月8日、明治天皇は翌春再び東
京へ戻ることを約して還幸の途へ、12月22日京都に入った。25日
には、予定通り孝明天皇の三回聖忌が滞りなく行なわれた。この日
は夜来の雨が降りやまなかったが、天皇は紫宸殿の神事を終える
と、直衣に着替え、陵のある泉涌寺の泉山に行幸した。

三日後の28日、天皇の花嫁 条美子（昭憲皇太后）が入内し、
その日に女御とする宣下があり、皇后に立てられた。入内の日に
女御宣下と立后があるのは旧来の例とは異なっていた。この時、明
治天皇は16歳、美子は19歳であった。

このように、明治維新をスタートするに相応しい吉事をもって、
明治元年が終った。

『酔いの徒然』（二二六）

丸山 酔宵子

『箱根の風神雷神』

夏の終わりの濃い緑に包まれ、湯の香りとしつとりと水を湛える芦ノ湖の中の箱根は、様々な美術館やお洒落なミュージアムが良く似合う。

夏果てる箱根の山は湯の香り

酔宵子

ポーラ美術館、箱根美術館、成川美術館、彫刻の森美術館、箱根ガラスの森ミュージアム等は昔から有名であるが、平成23（2013）年に箱根町小涌谷にオープンした岡田美術館には度肝を抜かれる。

岡田美術館の存在すら知らなかった訳で、「岡田」と冠しているから、例の熱海にあるMOA美術館や箱根美術館を開設した、世界救世教の創設者である岡田茂吉の關係だろうと思っていたのであるが、全く関係ない独自のユニークで重厚な美術館なのである。

京都生まれで、スロットマシンで財を成したユニバー

サルエンターテインメント創業者・岡田和生が収集した東洋・日本美術コレクションを展示する目的で設立され、古代から現代にいたる日本・中国・韓国の陶磁器を中心に、日本美術は主に近世・近代の日本画を所蔵している。

岡田美術館は明治時代の箱根のホテル「開化亭」跡地に創設された5階の建物で、敷地は美術館やミュージアムの多い箱根の中でも、屈指の広さを誇っている。美術館正面の大きな壁には、縦12メートル横36メートルに渡る640枚の金地パネルに描かれた新進気鋭の日本画家・福井江太郎の『風・刻』と題した「風神・雷神」の大壁画が威風堂々と飾られ圧倒させられる。

また、「風神・雷神」の巨大壁画全体をゆっくり見られるように、湯の町箱根らしく、入り口正面には、100%厳選かけ流し（加水・加温なし）がお洒落に用意されているのである。

足湯から眺める壁画秋あかね

酔宵子

岡田和生なる人物をネットで調べると、テレビ修理業から叩き上げ、スロットマシンで大成功し、フィリピンのカジノで成功したり、香港では脱税で起訴されたりと波乱万丈の人生で、現在も健在であるようだ。

枕木のリヤカー運搬から裸一貫で事業を起こし、一代で日本画の大コレクションと素晴らしい日本庭園を作り上げた足立博物館（島根県安来町）の創立者・足立全康との共通項があるようだ。安達博物館には、130点に及ぶ横山大観の傑作を所蔵しているが、岡田美術館も負けてはいない。

1948年以降に所在不明になった喜多川歌麿の肉筆大作「深川の雪」や、83年間所在不明であった伊藤若冲の「孔雀鳳凰図」などの傑作が何気なく展示されているのである。

先に紹介した熱海MOA美術館の創立者である岡田茂吉は事業家でもあり宗教家でもあり美術収集家もある不思議な人物である。

昭和27（1952）年に「世界的な美術思想の涵養を通じて人間品性の向上、平和愛好思想の醸成を図ることにより高度の文化的芸術国家の建設に寄与する」ことを願って、自然の山水美と人工的庭園美を調和させた、一つの芸術品を造ろうとしてこの「神仙郷」を造営し、その中に箱根美術館を開館したのである。

「神仙郷」は、岡田茂吉が、昭和19年から28年までの戦中戦後の混乱期に造営した庭園で、築山、溪流、瀧、園路などを組み合わせ、柔らかな緑の絨毯のような苔が

一面に敷き詰められた広い「苔庭」には紅葉が配されている。「苔庭」では作務衣を着た庭師が、ピンセット持って丁寧に苔を撫でるように手当てをしている。秋の紅葉時の深い緑と深紅の鮮やかさが目に浮かぶ。

紅葉を待つ絨毯の苔青し

酔宵子

ばってん長崎 歌の街

高橋育郎

1 長崎 長崎 歌の街

蛇皮線胡弓の なつかしや
精霊流しの 灯がゆれて

チャンコン蛇踊り 賑やかに

七色花火が 空に咲く

*バツテン長崎 旅ごころ

来まつせ 見まつせ ドーイのドイ

2 長崎 長崎 味の街

名物チャンポン 皿うどん

しつぽく料理で 舌つづみ

みなと夜景に 海の幸

リボン可愛や ザボン売り

*くりかえし

3 長崎 長崎 坂の街

4

オランダ屋敷の 石畳
青いガス灯 むらさきの
ギヤマングラスに 耳かざり
影がゆらめく 夢の夜

*くりかえし

長崎 長崎 夢の街

ジャガタラお春の 曼珠沙華

蝶々さんの 花の帯

未練出船が 咽び泣く

赤いランタン 恋模様

*くりかえし

5

長崎 長崎 鐘の街

浦上 大浦 天主堂

十字架の屋根 ひかる星

夕べの祈りは 平和へと

鐘鳴り渡る アンジェラス

*くりかえし

絹の話 (143)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹と釣り糸

釣りは今日静かなブームになって、日本の釣り愛好人口は1000万人を超えるレジャーになって来ました。私も幼少の頃から三河湾でハゼ釣りやキス釣り、夜のタイ釣りなどを楽しんだものです。

釣りをするには餌獲りから始まります。ハゼであればアサリ、タイであれば袋ムシを海に獲りに行って、竹竿に道糸のテングスを結び、竹ひごで編まれた竹ひご蓋の付いた籠を持って出かけたものです。思えばおとぎ話の浦島太郎とあまり変わらない出で立ちでした。

釣りの泣き所は大切な糸が岩にこすれると切れたり針を取られたりする事でした。

釣ったものは決して粗末にせず、ハゼなど大量に釣れて食べきれないものは、焼いて、蓮にして干して、甘露煮用や家で使う煮干の代わりに役立てました。買い求めるイワシの煮干より品の良いダシがとれて、ささやかな家計の足しになっていました。

釣りの歴史

人類は道具を使い始めた頃から釣を始めていた様で

す。世界中の遺跡などから獣骨を加工したものや巻貝のカーブを利用した貝針などの釣り針が出土しています。釣り糸はほとんど出土しませんのでよく判らないようですが、釣りの初期は植物の蔓や大麻などの強力な植物の繊維が使われて、次第に細い馬の尾や人の髪の毛、動物の糸が使われて進歩してきた様です。しかしこれらの糸は魚に丸見えで、なかなか思う様に魚は釣れません。

ところが、古代から現代まで、海辺に暮らしながら釣りをしない人たちもいます。今から50年以上前私が南太平洋のニューヘブリデス諸島の島に滞在した時、海辺の人達は魚捕りに行くというのに、木の枝の先を尖らせた棒を持っているのみで、釣り道具は誰も持っていません。彼等は岩場にひそむ魚を棒で突いたり、海に浮かぶ流木や浮遊物下に群れている魚を手掴しておりました。

絹の釣り糸の出現

中国で絹糸が出来て、紀元前10世紀頃になると早くも釣り糸に使われ始めました。絹糸は細くて引つ張りに強く、白く透けて水中で光りを乱反射するので魚に警戒されず、魚がよく釣れる様になったと思われまます。

テグス糸(天蚕)の登場

中国ではおそらく宋の時代には山野に生息する5歳の天蚕(糸を吐く直前)の首を切ってシルクゲルを採り、酢で処理し、細い穴を通して「テグス糸」を作っていた

と思われます。それを使って宋の貴人たちは釣りを楽しんでいたのでしよう。

なぜ天蚕が使われたか

当時豊富にあった家蚕を使わずになぜ天蚕を使ったのでしょうか？

天蚕のテグス糸は家蚕のそれより引きに強く、シヤンパンゴールドに光る光沢は魚に警戒感を与えず、糸が切れにくく、大きな魚もよく釣れたので、漁師達が使い始めたのではないかと思われます。

家蚕の糸は権力者の衣服を作り、大きな利潤をもたらす交易品であったので、糸以外の転用を禁じていたのかもしれない。

釣り糸には天蚕ばかりでなく、身近な屋外に生息する野蚕、特に網目の繭を作るクス(樟)蚕なども使われていた様です。

日本への伝来

日本へは中国から漢方薬の包みを結ぶティエンツァン(天蚕)紐として輸入されて「テンサン」とよばれるようになりました。その紐は非常に丈夫で透き通っていた為、江戸時代中期に漁師が釣り糸として利用し始めましたが、とても高価で庶民が使える様なものではありませんでした。それでも江戸時代も元禄の頃になると、ゆりの出来た武士の間に釣がもてはやされるようにな

り、1730年代になると長野県穂高周辺で天蚕の織物が組織的に作られ始め、同時に天蚕の釣り糸もテグス(テングス)として増産され、1940年頃安い人造テグスが出現して、一般の人達の間で釣りが急速に広がって来ました。

釣り糸と釣り銭

買物をした時、お返しを「お釣り」というのはどうしてでしょう。

魚釣りは本来魚を吊り上げるので「ツリ」と言われ、買物物のツリは品物を買って、高額な対価を支払われた時、品物の値段と支払額がつりあわないので、買った人に渡した品物とその差額を埋めあわせる小額な銭で、価値の均衡を図った事から「つりあう」(均衡)という意味で「ツリ」といわれるようになりました。

釣り糸と環境保全

今日の釣り糸は非常に強力な化学繊維になりましたが、テンサンから作られていた時と同じ様に「テグス」とよんでいます。釣りが大衆化して、釣り糸が各所に放置され、鳥などの足に絡み自然環境の劣化を招いています。長い間に化学繊維の釣り糸はナノ分子に分解され水質汚染にもなっています。

「江上浩二の独り言」 58 江上浩二

白…知らないことの新しさ

最近、読み聞かせ、それも文字を習う前の小さな子を対象としない、大人の読み聞かせを体験する機会があった。大人を対象にするので、朗読やちよつとした江戸時代の小話を聴く、みじかい落語の感じがした。このような体験の延長で声優さんのいろいろな作品を朗読している Youtube を検索・視聴し、そんなことを暇に任せてお盆休み前にしていたら、芥川龍之介の作品は短編が多いので、結構、朗読対象になっていたことを知った。これまで、長編作品のたけくらべなど難解な樋口一葉の作品に挑戦し、そのままになっていた。今年のお盆前には芥川の羅生門の朗読を始めとして、蜘蛛の糸を繰り返し繰り返し、聴き惚れてしまった。

そして、六九歳になって初めて知ることになる「白」という短編作品が Youtube のトップページを飾っており、それは淡いグレーと濃いグレーの単調2段階でデザインされて、特徴の無い犬が淡いグレーで描かれており、ははーん、これで〈へしろ〉という犬の話になるのだなと思ってしまう。以降、私はその朗読を聴いた「白」の

感想を呟くつもりはなく、詳しくは文字で全貌が紹介されている青空文庫などを参照して頂きたい。

さて、子供の絵本の読み聞かせ会などがあるが、文字をまだ知らない小さな子は絵本で与えられているカラフルな絵柄という作家特有な映像と耳から得た聞きこぼし情報を的確に覚え、自分の頭に刻み込んでいるのだ。諦んでいる自分の知っている絵本の内容を早くお披露目したく、我が家では子供がまだ小さい時、家内が絵本を読み始めると長男がまだそこまで進んでいないストーリーを弟・妹にばらしてしまい、よく小さな喧嘩の始まりとなった。

大人の読み聞かせには例として初めて聞く作品の朗読が一番だと思う。初めて聴く新鮮な言葉を受け入れ、それを瞬時に同期させ、こんな情景なんだろなとか、思い浮かべる自らが創造する色合いの情景は私には楽しい。個人個人によつて情景の配置や色合いは異なつて当たり前であろう。しかし、著名な作品が映画化、TVドラマ化され、さらにヒットしてしまうと自分で想像するといふ前に監督だのドラマ演出家の意図が前面に出て、作品の著者が意図していない方向へどんどん行ってしまう事もあるが、そういう時は小さな諦めも必要だ。

私は初めての「白」から1週間ほどして、2度目の〈へしろ〉を探した。というのは、芥川は結婚9年目で自

殺してしまつたが、その4年前の結婚5年目にして自殺を暗示させる作品を残そうとしていたのかと背筋が本当にゾツとした。隣のくると呼ばれる黒い犬が犬殺しに捕まり、自分は咄嗟に逃げ、自分だけ生き残つた事を苛み、「白」の中で1度だけ自殺したいということばが出てきた。

実は(へしろ)は外觀が黒い犬「芥川は鍋底よりも黒いと表現している」に変わつてしまい、田端の駅付近から流浪の旅に出るのだが、出来れば死にたい死にたいと、あちこちで、蛇や狼と戦い、火や鉄道に飛び込み子供を助け、アルプスの山では遭難しかけた一高生を助け、死にきれずに自宅に戻るのがある。その流浪の旅は決してカラフルでなく、ほとんど白黒の世界に近かつた。

数年前、私は芥川が世間で言われている神経衰弱で病み、藤沢の鵜沼の海岸近くで療養し、自殺する前に東京田端の自宅との間を行き来した時期について調べた。新婚生活を始めた鎌倉にも近い鵜沼、その後田端の自宅に戻つても二階に籠り文章を練る作業に没頭し、神経衰弱の源は自分の作品なのか、それとも別なものなのかと、さらに健康もすぐれずにいたという。鎌倉や鵜沼と聞くとも自然豊かな、新緑の緑を表現する場合や碧い海と連なる同じくあおい空を表現する場合には、組み合わせや、グラデーションまで考えると数え切れないわくわくする

空間を想像し、そんな色合いが豊富な世界・暮らし向きを勝手に考えてしまふが、実はそうでなかつた芥川の白黒の濃淡の世界が支配していたのだらうと思つた。

朗読を拝聴し、自らは書かれた文字を目線で追う作業の代りに(といより軽減し)、余裕を持つて色とは別の次元の世界の探索、つまり書き手の気持ち、意図、精神状況、心理状態等々を想像・推測出来ると信じている。(へしろ)は人の話していることは分かっている。しかし、人は(へしろ)の言葉は分かつていないという。「白」では精々茶色い世界までしか覗けず、それでも裕福だと思ひ詰めている。(へしろ)が何とか自分の家に戻つて来るが外觀が黒く汚れているので、坊ちゃん・お嬢ちゃんには分かつてもらえず、手荒く・ぞんざいに扱われてしまう状況に落ち込んでしまつた。

よく、漱石の話で出てくる「Love you」を月が綺麗ですと訳せる心持と、どうしても引用させて頂きたいのだが、芥川と結婚が決まっていた文はお相手のお名前は聞かれても言ひ出せずに、そつと羅生門の冊子を差し上げたという逸話を最近知ることになって、芥川も文さん位のある種の心持の余裕があればもつと長い結婚生活をおくれたのではないかと思つた次第です。



初狩便り (11)



花野みぷり



稲刈り

いよいよ稲刈り。黄金色に輝く田んぼにコンバインが入っていく。コンバインは稲を刈り、籾は袋に、藁はカッツトして田に撒き散らす。コンバインであれば一人でも刈り取りできる。

だが私たちの田んぼは、稲架掛はさかけ・天日干しをするためにバインダーと手刈りで稲刈りをする。

バインダーは、稲を刈り取り、十株ほどを束ねる機械だ。もう一つの手刈りの稲刈りは「笑顔の田んぼ」のイベントである。老若男女が集まり、稲刈りが始まる。子どもたちも鎌で手刈りをする。「鎌は研いである。よく切れるからな。下手に使ったら足を切るぞ」。危険な鎌の使い方を聞く子どもたちは真剣である。大人も子どもも鎌を持ち、稲を刈り進む。稲株を左手で掴み、ザクツと切る。ずしっと重い。よし豊作だ！ 喜びの瞬間である。手刈りとバインダーで刈られた稲は、稲架に掛けられていく。みんなですると楽しいし、早い。

稲刈り終え畦に座ると、具たつぷりの味噌汁とおにぎりが配給される。畦で食べるとおいしい。なんか幸せ。

(写真…菅野昌英・文珠正也)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2022年9月7日

季節の変わり目と何の日？

すっかり蝉の鳴き声から秋の虫の鳴き声へと変わりました

今年はかなり不安定な気候ですが

四季がある様な気がします

面白い事に

9月8日は休養の日

9月9日は温泉の日

更に 今年の十五夜は9月10日になります

丁度この時期夏の疲れが始めます

休養して温泉にゆっくりゆっくり十五夜お月様を見る

偶然ですが面白いですよね

たまたま感じますが

季節の変わり目は身体への負担と疲れやストレスが重なること

いきなり大きく体調を崩します

ですので

3S+ゆたぼん+ヨーグルト

はもちろんですが

ホッとできる一息をしっかりと作りましょう

そして

今日も笑いながら行きましょう

2022年9月12日
綺麗すぎる十五夜

最近の 本田のひとり言 にも書きましたが

9月10日は 十五夜 でした

1年に何回もある満月ですが

十五夜の満月はとにかく綺麗でしたね

お月見という風習がとても素晴らしへ

ご先祖様や何千年前の人々が

あの綺麗なお月様を見るために空を見上げていたと思
うと

何とも浪漫のある十五夜です

先日

「夏に刺される蚊より涼しくなつて刺される蚊の方が
痒いし腫れませんか？」

という質問を患者さんから受けました

確かに

これは 以前も書きましたが

8月の終わりから9月にかけて

ブタクサなどの花粉によるアレルギーが出ています

その状態で刺されると

アレルギー反応が出て症状が大きく出やすくなります

ですので

一度に沢山刺されない様に気をつけましょう

あと

傷口もアレルギー反応が出て治りが遅くなったり

悪化しやすいので傷や怪我にも気をつけましょう

今日も笑いながら行きましょっ

「秋の実り」

秋は実りの季節なり
夏の陽気の気を受けて
栄養蓄え余力を作り
余力が満ちれば 実りとなる
春は風受け 葉を揺らし
夏はお日様 葉を茂らせ
しっかり季節を受け入れりや
秋には実りが齎もたらされる
実りは 結果があらわれる
春や夏のあり方が
秋の実りにあらわれる
どういうあり方してるかが
美味しい実りをもたらすぞ
不味い実りとなったなら
春や夏のあり方が
厳しく 無理して 疲労して
回復できずに いた結果

実りは 人にも当てはまる
人の実りは 心の実り
精神充実 身体元気
それまでどう生き動いたか
よければ実りは充実し
悪けりや実りは空虚となる
実りは結果で 次の種
新たな成長の糧となる

天の気 気候は どう
だった？
地の気 環境 どうあつ
た？
人の気 関係 どうだつ
た？
天地人の気が混ざり合い
人生 形を突らすぞ
実りの秋が過ぎたなら
実りは種となりなりて
冬の大地にもぐりつつ
次の春への準備をす



「涙はハッサン」

涙は目の液・肝の液

肝気が涙を調節す

肝気は内面動かす気

情動・感情生み出して

肝気が動いて表現す

涙は発散 陽の極まり

気持ちや感情 落ち着いて

ほっとし笑顔が 次に来る

気持ちや 感情 行動が

極まりや 落ち着き ひと段落

緩んで 喜び 涙出る

気持ちや 感情 行動を

抑えりや 力んで滞る

肝気が塞いで イライラし

ストレス溜まって 涙も止まる

涙は悲しい時に出る

涙は嬉しい時に出る

涙は笑う時に出る

涙は怒る時にも出る

あらゆる感情極まれば
涙が出てきて 発散じゃ

気持ちや感情通じずに
停滞していた 心の奥

わかってくれる 人がいりや

抑えていた気が 外に出る

表現できれば 涙出て

落ち着き 笑顔を取り戻す

涙は発散 気が緩む

涙は発散 報われる

涙は発散 落ち着

くぞ

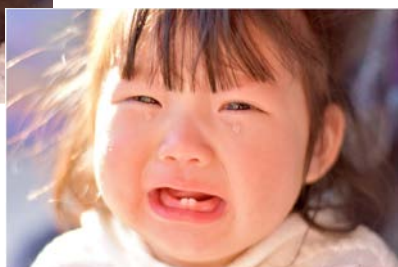
泣くときや大いに

泣けばよい

涙の先に 笑顔あり

笑顔の先には成長

じゃ



【隱岐島吟行会】

〔川口カルチャースクール有志〕

隱岐おきの島しま吟行ぎんこう
(其その一いち)

横山精真

機中岸きちゅうぎしを離はなれて 蒼鱗そうりんを見みる

翠嶂すいしょう白涯はくがい 塵ちりを絶ぜつするが如ごとし

勝景しょうけいは仙寰せんかんたり 三四さんしの島しま

客程かくてい客舍かくしゃ 人ひとに接せつして悖あつし

隱岐島吟行 (其一)

機中離岸見蒼鱗 翠嶂白涯如絶塵
勝景仙寰三四島 客程客舍接人悖

(語釈) 〇蒼鱗：鱗のような蒼い海。〇翠嶂：緑の連山。〇白涯：白い波打ち際。〇勝景：素晴らしい景色。〇仙寰：俗世間を離れた世界。〇三四の島：隠岐の島は最大の島の島後とうごと幾つか島が集まった島前とうぜんから成る。〇客程：旅の道中。〇客舎：旅館。

〇惇：人情が厚い。まごころ。

(通釈) 飛行機が島根の海岸から離れると夏の天気には恵まれた海は穏やかで蒼い鱗を見るようだった。やがて目的地に近づくと緑の山々と白い波打ち際が見えて、まるで俗塵を途絶するかのようだ。

島に着いて車と舟で島々を観光したが、素晴らしい景色は俗世界を離れたと言うべき珍しい自然であった。そして観光案内や旅館では人々の真摯で人情厚いものを感じた。

※ 川口カルチャーで希望者十名の久しぶりの吟行会を考えた。隠岐の島出身の藤村さんがいるから、二泊三日の旅を全て藤村さんに任せた。羽田から大阪は伊丹空港で乗り換え一路隠岐の島へ。乗り換えの合間の時間で昼食だが、大阪の食は興味が引かれる。一番は手軽なたこ焼きだ。私は京風のお稲荷さんと人のたこ焼きを一口。旅の気分が徐々に出てきた処で出発。久しぶりにプロペラ機に乗るのかと思ったら、立派なジェット旅客機だ。今はプロペラ機はそもそも亡くなったと誰か言う。島にジェットが着陸するのかと訝りながら乗り込んだ。上がったと思ったら着陸態勢に。早速の観光の印象はと言えば、山々は緑深く、海の景色は絶海の島らしく荒海に削り取られた奇岩が目立った。神社が多い。兎に角神ノ島の感が強かった。コロナには罹らないよう神頼み。

隱岐おきの島吟しまぎんこう行こう（其その二に）

横山精真

正殿せいでんに高吟こうぎんして竹帛ちくはく明あきらかに

上皇じょうこう遷せん幸こうして詠懷えいかい清きよし

緑山りよくざん青海せいはい人ひと棲すむに易やすきも

潮しおは断崖だんがいを洗あろうて情じょうを滅めつするが如ごとし

隱岐島吟行（其二）

正殿高吟竹帛明 上皇遷幸詠懷清
緑山青海人棲易 潮洗斷崖如滅情

(語釈) 〇正殿：御祭神は後鳥羽上皇である隠岐神社の本殿。 〇竹帛：歴史。 〇遷幸：天皇・上皇が他の居所に移ること。 〇詠懐：後鳥羽上皇は和歌に秀でられ「新古今和歌集」の編纂を主催され、「遠鳥御百首」が残されている。

〇転句の意は、天皇が配流される所はお供の者達を含め生活に困らないような地で、(且つ容易に帰れない所)が選ばれた。

(通釈) 私達十人は隠岐神社にて本殿で吟ずるようになめられたが、遺詠を三首吟じた。自ずと歴史に触れる思いが強くなった。後鳥羽上皇はこの在所で和歌を多く詠じられたがその和歌に心境の清らかさが感じられた。

隠岐の島は緑の山は豊かで海産物も豊かであるので生活するに十分な所である。が、多く海岸は切り立つて強い波で岩は削られている。これを眺めて都を思いう気持も消え入るばかりであられたろう。

※ 隠岐の島は後鳥羽上皇と時移って後醍醐天皇が配流された。隠岐神社では遺詠が書かれた板を見つけ、吟じていると守り役の人がわざわざ出てきて、本殿で正式に吟じなさいと誘われた。板も抱え移して、さあどうぞと大変なご親切を受けて私共は恐縮した。十名はそれだけでも来た甲斐があったとよろこんだ。

処で「ここだったら私も流されて良い」と冗談を言ったら、そうなんですよと案内の人が言う。天皇が流される地の条件は右記の通りである。私の冗談は的を射ていたのであるが、旅の余韻でつくづく思うのは、日本の歴史は外国とは異なり、天皇中心の特別の歴史を持った国だと認識を新たにしたものだ。一世代違った先生方にも自ずと思いを致したのである。

【俳句】

日ぐらしにさそはれ合吟隠岐神社

雅山

隠岐の夕光り輝くローソク島

秋近し隠岐の旅路に岩灯る

雄山

隠岐の波ローソク島に碎け散る

隠岐神社上皇御前吟奉納

神の国山と海との摩天崖

行く夏や隠岐の別れに島灯る

隠岐の島吟の有志と夏の海

悦三

夏来る思いを馳せる隠岐の島

真夏日にはるばる来たぜ隠岐の島

隠岐の社吟詠呀へて森涼し

君恵

壇境の滝吟声響くぎんこうかい

とものかおおさなきころの夏祭り

隠岐の島吟友と語る生ビール

かぜかおる壇境の滝水うまし

ゆうなぎのローソク島にひかりの筋

隠岐の島夏牛角力に友の顔

おきたびのふるさと近し雲のみね

恵風

夏の海どこまで遠し隠岐の島

ローソクは夏夕陽の隠岐の磯

四十度を逃れて沖の隠岐の島

羽衣荘延長の酒夏うまし

信吾

夏の海ローソク島に手を合はせ

紀山

隱岐の水壇鏡の滝吟しみる
壇鏡だんきょうの滝たきにしみる吟ぎんの聲こえ
神の水壇鏡の滝吟しみる

秋山

エゴの実の青さやさやと神みもと

由利

忍ぶるは後鳥羽上皇初夏の島

百敷や父読みあぐるカルタ取り

夏滝の飛沫に濡るる神の島

雄滝あり雌滝もあり若葉風

夏薊なつあざみ木々草々よ神みもと

神と人と端雲たなびく隠岐島

隠岐牛と隠岐馬といて青天崖

【短歌】

信吾

○ 隠岐の島おごそかに浮かぶ神の島空から降る吾も亦神

○ 官人は舟で流さる隠岐の島十二里半をゆられゆられ

由利

○ ヲトツトツトツヅエンジン音を携へて隠岐の島へと上陸す

○ ブナ・コナラ・ミズナラ・ケヤキ・クリもあり三瓶山の自然のもとへ

○ 隠岐造り玉若酢命神社の御前にて延喜式の頃を偲ぶよ

○ どこかしこ神様をらるる隠岐の島素直になりゆく自ずから

○ 牛達が馬達がゐる摩天崖人間のままの私もゐて

○ 天然の空気といふを深く吸ふ天然の水の流れを両手に掬う

○ 女神の水火難防止の水長寿者の水万病に効く私に効く

○ ひとつ言葉ひとつ心に敏感になりたることよ隠岐の島

○ 日本の古来よりの五七調我身に仕舞う宝と仕舞う

○ 歴史的背景をもつ悲しみは今もそのままその悲しみを

編集室だより 〔二〇二二年八月〕

今泉 由利

○歴代の天皇、何度熊野詣をされたか？。土屋文明先生も、三回目、四回目…と短歌に詠まれ、回数を記しておられる。私の場合は、ただ出掛けて行ったという視点の熊野詣は二回。西行の吉野の西行庵には、頂度桜が咲いている時を二度。偉い方々が、なされることを、どう…というのではなけれど、「その歌」の出来た所に立ってみると、このように表現されたこと、がジーンと伝ってきて…そして、自分なりの自分の作品に至る。

とても遠く、とても行けることには至らなかつた隠岐島。詩吟カルチャーのお仲間、隠岐島出身の友がいらして、お連れ下さることになった。

そこで少しは「予備知識を！」と思う時、とても忙しいことが重なり：隠岐島は「どこにあるの」この辺りで、出発してしまつた。

十人のグループだつたから、後からついてゆく旅。

え！日本国内なのに、一度目の飛行機、二度目の飛行機にのりかえる。そのうえ、船にも乗り変え！びっくりしているうちに、荒々しく、美しく、なおかつ神々しい隠岐島に上陸。

○思つてもみななかつたことの連続。だんだんに足がついて

きて、それにしても知識がなかつたのにもかかわらず、隠岐島を歩いている。歩く、車での移動…だんだん、うれしい気持が大きくなつてきて、ありがたい気持も供なつて見る、港、山、田、畑、家々、木々、草々…隠岐島の、どこまでも、どこまでも心がゆき届いた、なんと麗しい、清々しい、心地良い。

○玉若酢命神社、「延喜式」にも載る、隠岐の総社。

天然記念物の樹高二十九メートル、八百杉。後醍醐天皇の隠岐脱出の壁画があつた。

目的から目的へは、車で連れていって下さるから、ただ窓の景色をよるこんでいる。

○横尾山系、島後西岸に流れ出す壇鏡の川の上流、岩壁の中央に、壇鏡神社あり。この付近よりの清水は、高さ40メートルの男滝、女滝。流れ落ちる飛沫があがる。この湧水は、勝者の水、火難防止の水、長寿の水、両手に掬つて飲んだ味。生まれてこの方、私が飲んだ一番うれしい、一番美味しい水でした。身も心も命極めた味でした。生命の実感がありました。壇鏡の滝の水でした。

流域には、オオサンショウウオが生息しているという。宿の晩ごはんの食卓に、隠岐簗がありました。ひと口いたただいて、あ！壇鏡の滝で、両手にすくつて飲んだ滝水と、同じ味。この水が、このまま日本酒になつていたのでした。感動でした。夕食のごはんにも、滝水の味がありました。人生最高の味を得たのでした。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利